

飛耳長目

通巻186号 令和元年5月1日発行

「開頭」第71号 再建は宿直室の雑魚寝から(巻頭言)

森 信三

校長の研修会などの際、私は「宿直室の夜具は少なくて二人前、できれば三人前揃えてほしい」ということにしている。それは私には教育の真の再建は若い先生達が、授業後、事務や、成績の点検を終えると、誰言うとなく宿直室に集まって、教育談義を始め、そのうちにうごんでも食べながらいつまでたつても話が弾み、とうとう皆が宿直室に雑魚寝をしながらのお話が止まぬというような雰囲気からでなくては、できぬものだと信ずるからである。そのためには宿直の夜具はどうしても三組が欲しいというわけである。外が暗くなり出すと家へ帰りたくなって尻をもじもじさせるような人間には、事はやれっこないのである。私などあちこちの学校を見て回って常に物足りなく思うのは、校長室や応接室で、校長や首席やPTAの役員などという人々と話をするだけで、肝心のその学校で中心となつて、ハンドルを回しているような中堅級の若い人々と逢わしてもらえないことだ。本当を言えばそうした人々とただ会うだけでは、まだ足りぬ。やはり一緒に宿直室に泊まり込んで、そうした若手の張り切っている人々と雑魚寝をしながら、夜の更けるまで話し込むのであれば駄目である。この間名古屋の牧野小学校では久しぶりにそうした快味を味わった。五人ほどの若い人たちと話して、寝たのは午前の2時半頃だった。だがこの調子でなくては本当のことは始まらぬものだと思う。

共産主義への驚き(一)

森信三

周知のように「共産党宣言」の書き出しは「一個の怪物がヨーロッパを徘徊している。すなわち共産主義という怪物である」という有名な語で始まっている。確かに共産主義は当時一般の人々にとっては一大怪物であつたに相違ない。だがそれはひとり当時の人々ばかりではなく、現代の時代にあつても、ある意味では怪物性は消滅していないのではあるまいか。これは実に巨大なる怪物であり、絶大なる怪物だと私には思われる。

最も今日このような素朴な感懐を素直に表白すると、いわゆる進歩的な人々からは「今時何を寝ぼけたことを言っているんだ。それこそ痴人の寝言というものだ」と嘲笑せられることであろう。だが私は、そうした感懐が、現在の私にとつて事実であるなら、それを素直に表白することによつて、たとえ幾十万人の人々から嘲笑せられよう構わないのである。いや構わぬというよりもそれが私という人間の正味であるなら仕方ないではないか。

一　そこでいったい共産主義のどういふところに、私が驚いているかということが問題となるわけである。そのうち第一に学ぶべきは現実に対する分析が鋭くてかつ確かだという点である。そうしてこの点は、マルクスの「資本論」に始まり、レーニン、スターリンを経て毛沢東に至るまで、全く一貫しているように思われる。ここに「ように思われる」などハッキリした物言いをしないのは、私自身この点に関する研究が極めて幼稚未熟である。これを確言するまでに至っていないためである。これ故この点に関しては、私は今後できるだけ研究したいと考えている。しかし何分にもマルキシズムは膨大な世界観体系であるから、いつ

の日これがたとえある程度にせよ、果たし得るか。この点については我ながらまったく心もとない次第である。だがもともと私は愚直な性質ゆえ、年齢などというものは一切忘れて、今後微力の及ぶ範囲内の研究はしたいと思っている。

が、それにしても今言ったところの、共産主義の現実に対する分析が、冷徹かつ正確であるという点については、一般の人々が、もつと驚いてよいのではないかと思う。だのに何故か、一般の人々はこの点について、それほど驚かないのであろうか。私にはこの点が近頃不思議でならないのである。なるほどレーニンにも、スターリンにも全然誤謬がなかったとは私は思わない。「スターリンに誤謬なし」と言われているというが、しかし人間である以上スターリンにも誤謬はなかったとは言えまい。毛沢東についても、同様のことはやはり言えるのではないかと思う。

くもくもく（ひじちちよ） だがそれにも拘わらず、これらの人々の現実分析が大体において的確であって、著しい根本的な誤謬を犯さなかったという事は、たとえ詳しい専門的な研究をしなくても、ソ連邦が今日の強大を致し、また隣邦中国が四千年來初めての諸民族の大統一を実現したという一事を以て十分だと思ふ。この事実の前には、一切の議論は一挙にして吹っ飛んでしまふと私には思われる。

二

私は誌友諸氏もつとに御存知のように、学問の本義は現実の徹底的分析にあると考えている者である。私がよく「真理は現実の唯中にあり」というのも、之である。おころで私をして、この偉大なる真理に開眼せしめてくれた最大の恩人は、誰

あろうに二宮尊徳その人である。今この点について深入りすることは避けたいが、とにかくこれは私にとつて終生忘れがたい重大な事実である。

しかるに最近に至つてわたくしは、前にも述べたように、レーニン、スターリン、毛沢東というような一連の人々が、徹底した現実の大分析家であつたことに対して驚嘆しているのである。そうして、前にも言ったように、一般の人々が何故この点に関して驚かないかに、実は驚いている次第である。

私は共産主義者ではない。多分今後もそうではないかと思う。すくなくとも私が公式的な共産主義者になる日は来ないであろうと思われる。だが同時に私は共産主義の内に含まれている真実なるものについては、虚心にこれを認めたいと思うし、さらには頭を下げたいと思う。ところが現在私の共産主義に対する考えは、前にも述べたように、何よりもまず驚きということである。そしてその驚きは、レーニン以後毛沢東に至る人々の現実に対する分析の冷徹にして的確なる点についてである。

三

だが私の以上の言葉に対して、「だが一国を率いる大政治家で、その施策の方向が誤らなかつた者は必ずしもひとりレーニン、スターリン、毛沢東だけに限らず、史上には無数にある」と言つて例示せられる人もあるであろう。私といえどもそうした事柄を認めないわけではない。

だがここに一つの注意すべき事柄は、そうした大政治家ともいふべき人々は、それぞれその卓越せる天稟（てんぴん）によつてよく誤りなきを得たのであつて、それ以外ではないということであ

る。ところがレーニン以後の人々の場合には、その功をなし得たゆえんが、主として現実の冷徹なる分析によるものであり、しかも大切な点は、そうした現実の分析がマルクス主義という一つの思想体系を基準として可能であつたということである。この点の相違は実に重大だと私は思う。

もちろん私としてもレーニン以後の人々がそれぞれその天資において卓越せるものの所有者であることも拒もうとする意思はない。だが注意を要する点は、これらの人々の場合、今はその政策施策が重大なる誤謬を犯さなかつたのは、ただそれらの人々の天性の素質の卓越性のみによるのではなくて、そこにはマルクス主義によつて資本主義社会という巨大なる現実に対する冷徹なる分析によつて創建せられた学的体系が、その指導的原理として働いていたという事実である。

私はレーニン、スターリン、毛沢東というような一連の人々が、一貫してあのような功を収めたということとは、全くこの点に基因するのであつて、そこにはそれらの人々の単なる個人的資質の卓越性のみが帰すがたいもののあることを注意しているのである。

もちろん私としても、それらの人々が、個人的にもそれぞれ卓越せる稟質の保持者であつたことは寸毫もこれを疑おうとは思わない。そしてこのことはマルクス・エンゲルスの思想が、資本主義が帝国主義時代に入った時代のレーニンによつて、一段の展開を見、さらにこの点はスターリンによつて、アジアのナショナリズムと結びつけられ、毛沢東に至つては、複雑極まりなき中国の事態に適應せしめられたことによつて、証せられるのであつて、全てこれらの人々の卓越性は、マルキシズムをその形式的公式主義より解放しつつ、自己の民族の新たな現実に適応した点にあると

言つてよいであろう。

四

ところで共産主義について、最近私の驚いてい
るいま一つの点は、レーニン、スターリン、毛沢
東らの人々が、それぞれ巨大なる著述をしている
ということである。レーニンだけでも翻訳で23巻
ぐらひはあり、スターリンでも10巻前後はあり、
毛沢東選集も、最初5巻の予定だったのが、さら
に数巻増補せられる模様である。単にその分量だ
けから言つても、誠に驚嘆すべきことと言わねば
ならぬ。

ところが我々日本人はこうした事柄に対して、
たいして驚いていないようである。いや私自身す
ら最近に至るまで驚かなかつた一人である。しか
しごく最近に至つて、私はこの事実について非常
な驚嘆と驚愕を感じつつあるものである。それは、
普通の政治家の場合でもあれだけたくさんの著述
をするということは、全く容易なことではないが、
ましてこれらの人々の当面し克服した事態は、世
界史上に全くその類例を見ない重大にしてかつ深
刻な問題であつたからである。

しかるにこれらの人々は、そうした上空前の
難局に対処しながら、よくあれだけの膨大な著
述ができたものだと思うのである。純粹に学問を
専門とする学者や思想家でも、あれだけの膨大な
分量の著述をする人は少ないと言つてよからう。
ではどうしてこれらの人々にはそれが可能だつ
たのか。この辺のこと私にもよく分からないが、
とにかくに新たな人類の理想に対するこれらの
人々の情熱がこれを敢えてせしめたと言ふほかあ
るまい。

この点からして近頃私の感じることの一つは、

これ人々こそ実は人類が多年そのイデーとして求
めてきた「哲人政治家」という言葉の該当する人
々ではあるまいかということである。こう言えば
多くの人々はさぞかし意外と驚かれることであら
う。さらには私がこの種のことをいうのを好まぬ
向きもあるかと思う。だが私は、そういう人々に
対して言いたい事は、「すべて真理の探求にあた
つては、お互いに古い感情によつて支配されては
ならない」と。

現に私自身も「哲人政治家」という言葉によつ
てかつての理想像してきたのは、決してレーニン
とかスターリンとか毛沢東とか言う種類の人々で
はなかつた。そのかみ私が「哲人政治家」という言
葉で連想した人々といへば、孔子とか聖徳太子と
かプラトンなどと言う人々であつた。だがこのう
ちプラトンは周知のように理想の国家では「哲人
こそまさに為政者たるべきである」という文言を
したにとどまつて、彼自身は何ら現実の政治家だ
つたわけではない。また孔子についても、なるほ
ど孔子はある意味では、「哲人政治家」という言
葉が当たらぬ人間ではないと思う。ただ問題は彼
は現実の政治家としては、その局に当たつた期間
が短く、かつ政治家としては失敗した人だとい
うことである。かくして「哲人政治家」という言葉
がある程度当てはまるのは古い時代にあつてわず
かに聖徳太子くらいのものであらう。

ところがレーニン以下の人々は、いずれも最近
の人々であり、そのうち毛沢東は現にその活動の
最盛期にある人である。スターリンも没して、ま
だ半年とは経っていない。そしてこれらの人々の
著述は、その根底に雄大な世界観の体系を具え
つつ、常に困難なる国際的政局の間において、自
らの民族をどのように導いて行こうかという、現
実必至の問題の解決に腐心するところから生まれ

来ている。このことは特に毛沢東の著述を読む時
はつきりする。それは彼がその全精魂を傾けて取
り組んだのが日本の軍閥だったが故に、我々にも
いつそう身にしみてわかるのである。

五

こうは言つても私は、レーニン以後の人々の演
じつつある役割は、人類文化の上ではテーゼの立
場に立つのではなく、それに対するアンチテーゼ
の色彩をおびるものであることを拒む訳ではな
い。そして私がこれらの人々を一種の「哲人政治
家」と呼ぶことに對しても、もし異様な驚きない
しは反感があるとしたら、元々それは我々の今日
までの通念としては「哲人政治家」と言うことば
は、人類文化のテーゼ的具体現者の意に解せられ
てきたためであらう。

最近の読書から

森信三

最近の私は何を讀んでいるか。人によつてはこ
うしたことに興味を持つ人もあるかと思う。
専門……というのもおかしな話であるけど、私
が自らの知業を果たすための中心的課題としては
デューイをマルキシズムを媒介として立体的に：
：自分なりに喰ひ抜けてみたいと考えているので
あるが、この点については、いずれ改めて一文を
書いてみたいと考えているゆえここには触れない
でおく。

そこでそうした意味での専門の仕事を別にすれ
ば、最近私の讀んだ書物のうちで、最も深い感銘
を与えられたのは何かというところ、それは竹内好氏
の書物だといつて良い。氏の名前は二、三年前か
らは知つてはいたが、しかし最近に至るまで私は
氏についてほとんど知るところがなかつた。とこ

ろが最近ふとしたことから氏の著書を読んで、この人は現在の我が国において最も貴重な存在の一人であることがわかったのである。

氏は信州出身で、お会いした事はないが、もちろんその思想の上ではなくて、人柄についていうのであるが、どこか金原省吾氏などに通ずるものがあるのではないかと言う気がする。書物は、4冊ほどの著述と数冊の中国文学の翻訳とがあるようであるが、年齢は40の前半くらいらしく、どちらかといえば寡作の方と言ってよからう。最近まで慶応の講師をしていて、この4月から都立大学の教授になられたようである。専門は中国文学。

では私が何ゆえに氏を推重し、氏の存在が現在の我が国において貴重だとするかというに、氏は魯迅の研究者であって、その処女作「魯迅」（創元文庫）は、心ある人々からわが国近來の名作の一つと考えられているようである。それはこの「近代中国文化の母」というべき巨人と取り組んで、これを文字通り自己の血肉として描いているからである。換言すれば氏はこの一人の巨人を読み抜くことによって、自分の生き方を確立したと云ってよからう。このことは氏の「魯迅」一巻を読むことによって心ある人なら何人にも容易に感受できる事柄である。

それは一言で言えば、文学を政治に隷属せしめず、あくまで文学の主体性を確保することを通して、かえって民族生命の巨大なる変革に貢献した魯迅の道を歩もうとするのである。換言すれば文学を容易に政治の手にしなないで、あくまで文学としての本道を掘り抜くことを通して、……それがやがてその置かれていた民族の危機的境位の故をもって民族生命の変革に貢献することとなるという立場である。

こうした立場から新しい中国の基本的な骨格を

……しかもそれを常に我が国との対比において描いたものが「現代中国論」（河出書房「市民文庫」）であって、この書もまた現代の我が国においては、実に得易からざる良書といふべきであろう。私などこの書物を幾たびも店頭で目にしながら、氏の思想的な立場とその人となりを知らぬために、長い間読まずに来たことが今にして悔やまれる。敢えて一読をおすすめる所以である。

以上の二書を踏まえて、日本の現代を批判したものが、「日本イデオロギー」筑摩書房の一書である。「日本的イデオロギー」という言葉は戦後左翼の人々が旧日本主義的思想家に対する批判において、盛んに用いた言葉であるが、氏の場合には正逆ともいふべき一種独特な用法で使われている。初めは私にもよく真意がわからなかったが、結局「日本的歪曲せられたイデオロギー」とも言う意味らしい。すなわち氏によれば、日本に入ってくるすべての思想が、日本的に病的に、歪曲せられて、その健全なる力を喪失するというのであって、この点マルキシズムも同様であり、その最も顕著なる現れが日本共産党だと氏はいうのである。

かくしてこの書の最後の4章は「日本共産党論」となっており、そこで氏はその透徹した批判の刃を日本共産党に向けている。その冒頭の「日本共産党論に対する私の不満を突き詰めていくと、それは結局日本共産党が日本の革命を主願にしないということに行き着くのではないかと思う」という一句はこの長大論文を貫く氏の立場を最も端的に表現したものととして、具眼の人々の間に問題となつていようである。

日本共産党に対する批判は、これまで右翼の人々にあらざれば、転向者によってなされるのが常であつて、未だかつて進歩的立場に立つ人によつ

て、行われたことはなかったと言つてよい。かくまでに徹底的な批判がなされるに至つたということは、そのこと自体がわが民族の前進に対して有する意義はけだし絶大なるものがあると言つてよい。

以上氏の三つの書物を、私はここに記したのを全く逆の順序で、読んで行つたが、最初にはやはりその方がよさそうである。最後に婆言を一つ。それは教師としての誌友諸氏が氏の書物を読まれるに唯一の「鍵」は氏が「文学」と書いていられるところを「教育」と言う文字に置き換えて読んでいかれることであろう。

（昭和28年7月15日発行「開頭」第71号7月号）

あとがきに替えて

共産主義について森信三らしいアプローチの仕方であらうかと思う。愚生は頭から一顧だにできなかったが、広い視野で物事を見て、良いところは評価するという基本姿勢はさすがに、一流のオピニオンリーダーたるにふさわしい。加えて新進気鋭の竹内好氏の著書を正面から捉えて論評される辺りは流石だと思ふ。愚生には出来ぬ。こうして一読を奨められても多分読まないだろう。興味関心のある分野のみ触手を動かす人なのである。御免！（30日二繁）

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

臂 繁二

電話 0744-4513422

Email: hji3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn